

干支学から見る子年の傾向

著述業 井上 象英様

2020年(令和2年) ^{かのえねしちせきんせい} 庚子:七赤金星

卓話者紹介 土居 岩生会員

田邊会員が紹介者ですが、本日お休みのため私からご紹介させていただきます。井上先生は東京恵比寿 RC 会員で、東京商工会議所 女性会理事も務められています。今回で9回目の卓話になります。

基本星(記号)

現在、私たちが使用する年号は「令和」です。しかし、運氣や運勢などを知る為にはその年や月、そして日々に配当されている和暦(干支暦)を知る必要があります。

古代中国「殷」の時代から使用されている暦は「自然周期学」と称され、宇宙の有り様は神の領域でもありましたが、孔子も孟子もその達人だったのです。

これらの星が様々に組み合わせられ、配置されることによって起きる自然のメカニズムが、数百年と経過することにより一定の条件が調った時、発生する自然災害を天災と言います。また、事件や社会情勢など、人間の運氣やバイオリズムにも深く関わりを持つことが解明されており、そこで最も暦に必要な記号が「十干」と「十二支」と「九星」であります。



干(かん) 10種類

(甲・乙・丙・丁・戊・己・庚・辛・壬・癸)

支(し) 12種類

(子・丑・寅・卯・辰・巳・午・未・申・酉・戌・亥)

星(ほし) 9種類

(一白・二黒・三碧・四緑・五黄・六白・七赤・八白・九紫)

その組み合わせは大きく分別して「36」、「60」、「180」通りになります。

十干と五行の関係

「五行」は地球自然界の構成要素で、木・火・土・金・水の五つの気(星)を指し、水を万物の基礎としています。

「十干」は太陽の作用で10日に一巡する天の気。気候や人の精神面に影響します。

陽(○) 甲(木のえ) 丙(火のえ) 戊(土のえ)

庚(金のえ) 壬(水のえ)

陰(●) 乙(木のと) 丁(火のと) 己(土のと)

辛(金のと) 癸(水のと)

十二支と月

・丑・寅・卯・辰・巳・午・未・申・酉・戌・亥・子
・1月・2月・3月・4月・5月・6月・7月・8月・9月
・10月・11月・12月

「十二支」は季節の12ヶ月を表し一年の周期現象。12日に一巡する地の気です。農耕や経済面に影響を及ぼし、天干(幹)に対し地支(枝)としての役割があります。

「干支学」

太陽の出没と深く関連し、万物の芽生えから成長、繁栄、衰退、消滅までの活動、物事や自然の変化の実体とそのプロセスを分類し説明したものであり、農耕社会におけるリーダーの心得でもありました。その内容は、自然の仕組みを背景に人生の在り方、暮らしの指針を表わしています。そして、人間が自然と共に暮すための「人道の心」と「あらかじめ準備する」心得を、干支学を通して説明しています。

庚(陽金)

音はコウ・カウ。「金の兄」で方位は西方にあって四季では秋に当たる。その意義は「經」(みち)で、象形では「更・継」を象り、秋の実りの姿(固い芯を張っている様子)。また、干の柎形に左右の手で糸をつむぐ意とされている。そこから「徑」や「経」の象意を指す。つまり、秋の収穫を終えて冬の到来を待つことを意味して居ります。これは前年の物を断絶せずに継承する貌であって、中断せずに更新する意義。次世代へ向けた期待と希望の表れでもあります。説文には「万物庚庚」(穀物が固い)とあり、固い筋の入った実を表現しています。

子(陽水)

1番目の地支。五行は水に属し、時刻では午後11時～午前1時の真夜中。方位は北(15度)。季節は冬の12月(旧暦11月)。すでに冬至であり、太陽が完全に沈み万物が休息の時。ただ、説文には「ね、万事滋」とあり、様々な新しい生命が滋り生ずる意とされている。転じて「孳」や「繁」に通じ、まさに陽気が芽生え始め、混とんとしているが、確実に地中で繁殖する働きを指しています。つまり、生命が誕生して成長増殖する暗示があるのです。その成長には勢いがあり善悪不二と言えます。

七赤金星

西方の30度。干は「庚・辛」支は「酉」に位置し、五行は「金」で「潤」の性質を持つ陰の星。また、流通貨幣に象徴される金属でもある。色は白と赤。「沢」を象る。易卦では兌(☱)で徳性は「悦・説」です。まさに果実が豊富に実り、万物が喜ぶ秋の収穫期を象徴しています。また、少女や飲食、会話の意もあり楽しみ満載。ただ、易象から判断すると、不足や不十分な事柄、修理の必要性、甘言や無益な情報の混乱の意も。不足の場合は、お互いに切磋琢磨し共に向上の道を歩み楽しむ。人間関係には最も必要な配慮の星です。

態勢

「庚」の意義は、左右の手を合わせ糸を絡む意味。つまり絲梓そのものを指していますので継承の意が強い。

「子」は新しい世代や世界を再生する為の活動に入る意。そして「七赤」の金は流通の象意。「2020・オリンピックの年」という歴史に残る一年。国内経済も新天皇を迎え、本格的に「令和」の平和と繁栄に向けた活動に向かうのではないかと。

干支や星が重なる 過去の歴史

*天保10年(庚子・七赤):人口調査開始。蛮社の獄。蘭学禁止令。豊年踊り。富くじ

*明治9年(丙子・七赤):廃刀例。士族の反乱。地租改正は農民一揆。私立銀行始まる。

*大正元年(壬子・七赤):明治天皇崩御。株価大暴落。内閣混乱総選挙。陸軍ストライキ。

*昭和5年(庚午・七赤):世界恐慌。経済の混乱。総選挙。米価暴落。伊豆沖大地震。

*昭和23年(戊子・七赤):帝銀事件。片山・芦田内閣総辞職。極東裁判。福井大地震。

*昭和59年(甲子・七赤):臨教審成立。総務庁発足。グリコ森永事件。三井炭鉱事故。

子年や七赤年の傾向

『隠ぺい体質の崩壊、IT世界のインフラ整備、技術革新、自然災害の連鎖』に拍車がかかる・・・とは昨年の予測。講演資料の一文でもあります。

今年は、2020のオリンピック効果が各業界や社会に浸透して、思いがけない地域や地場産業、観光業にも良い影響がある。人が動けばお金も動く。世界からのゲストや旅行者等で景気も賑わう暗示。ただ、株式相場や政治の世界では事件か事故を生む兆し。政界と業界との綱引きや金融界の世界は新たな局面を迎え、サイバー問題、架空取引事件など諸外国との軋轢も発生。自然界では、温暖化による異常気象は避けられません。